

川尻における水辺の地域形成に関する研究

熊本大学工学部 学生会員 ○安永龍一郎

熊本大学政創研 正会員 田中尚人
熊本大学政創研 正会員 岩田圭佑

1. 研究の背景と目的

緑川は熊本県の中央部に位置し白川とともに熊本の外郭を成す重要な河川の一つである。古くから舟運で流域の町は栄え市の南部の産業を支えた。

治水の歴史は古く、加藤清正による御船川の開削築堤、加勢川右岸堤の築造、浜戸川の導流堤などがあり、第一期改修は大正14年から昭和16年で一応完了したが、河川の荒廃がひどく、併せて支川を含めた疎通能力の拡大、引堤、策堤、堤防補強などの工事が進められている。

緑川流域の中でもっとも栄えた町が川尻の町である。年貢米や木材など運搬物は一度この川尻の港に集められその後支流などを通り熊本市などに運ばれた。運搬は舟運が主であり昭和16年に舟運の為の土木構造物、中無田閘門が建設された。この構造物は結果的には実質4、5年ほどしか利用されなかったが当時舟を通すためにとても重要な役割を果たしていた。現在も通過する舟の本数は減ったが扉の改修を繰り返しながら利用されている。本研究の目的は中無田閘門の建設を複数の資料から読み解き、川尻の地域形成を把握することである。

2. 緑川流域の概要

緑川・加勢川の特徴を明らかにするために自然環境や産業などを調査し整理した。

(1) 緑川・加勢川の概要

緑川は熊本県の中央部に位置する一級河川の一つである。加勢川は緑川水系の河川の一つで水源は熊本市の詫麻団地であり、流域面積は237 km²である。特性としては下流部に人口や資産が集積しており氾濫などが起こったときの被害が甚大であり、年間降水量の大部分は梅雨期に集中している。地質は阿蘇の火砕累積物などの透水性の高いもので構成されており湧水地が流域に点在している。また石橋やダム、農地を潤すための堰などの土木構造物が多く水利用のほとんどは農業用水や発電用水として使われている。



図1 緑川流域図

(2) 流域の舟運状況

舟運時代のもっとも重要な商品は米であった。川尻には米を貯蓄するための御蔵(国の重要文化財)と呼ばれるものがあり当時の肥後藩に収める年貢米は一旦、舟でここに集積され坪井川などを通じて熊本市の方に運ばれていた。また明治時代になると緑川上流の方からの材木の輸送が盛んになった。材木は上流で切り出し筏として組まれ筏師によって下流まで運ばれていた。また甲佐では石灰が取れ田んぼの肥料となるため熊野平野方面に舟運を利用し運搬していた。

3. 中無田閘門の概要

(1) 建設背景

1930年代ごろから日本は1937年に開始した日中戦争で食糧不足に陥っており、それに拍車をかける形で太平洋戦争が始まり食糧自給率を上げることは国をあげての事業となっていた。その為、本来田んぼが出来ないと言われる地域でも食糧を生産する必要が出てきたため緑川の西の流域で大規模な干拓がおこなわれることとなった。内容としては加勢川の河口部に六間堰を設け加勢川の水位を人工的にあげ、その水位差を利用して水を水位の低いほうの水路に流し田畑を潤すというものである。しかしそれに伴い加勢川の河口が堰により封鎖され緑川から川尻に向かう舟が合流できなくなり舟の運航に支障が生じるために川尻船着場への連絡路として中無田閘門が建設された。

(2) 建設経緯

表 1 「緑川第一期改修工事」内容年表

期間	社会情勢	緑川工事内容
1925		工事実施準備の測量および調査土地の第一次買収
1926		
1927	市営バス発足(17台)この時、市および市付近の人力車812、乗用馬車4、自動車115台	1927年に買収承諾を得て本格的な工事開始
1928	NHK熊本放送局でラジオ初放送	放水路嘉永新川の人力掘削工事着手 築堤工事実施
1929	水前寺動物園開園	
1930		
1931	満州事変	引き続き掘削工事と築堤工事 加勢川全域の護岸工事を実施
1932	失業救済の土木事業開始(12月) 515事件	
1933	国際連盟脱退	
1934		
1935		引き続き掘削工事と築堤工事。加勢川水門新設 工事及び開削の附帯工事として大曲用水路新設 工事着手
1936	226事件	引き続き掘削工事と築堤工事と新改工事を実施 嘉永新川の工事は計画の85%を実行
1937	日中戦争開戦	引き続き掘削工事と築堤工事。加勢川水門の工事は完了。新加勢川水門の工事に着手しさらに緑川 加勢川背割堤頭部護岸工事着手
1938	国家総動員法(物資や労働力の統制、運用) 第二次世界大戦開戦	嘉永新川の工事は計画の大部分を完了
1939	国民徴兵令公布	
1940	市営バスに木炭車登場	
1941	太平洋戦争開戦	中無田閘門完成
1942		
1943	学生徒などの戦時動員開始 電力及び街灯の使用規制が始まる アメリカ本土攻撃開始、集団疎開	
1944	国民学校学童給食・空地利用食糧増産計画 開始。熊本市電気が市交通局へと改称	
1945	終戦	
1946	日本国憲法公布	
1947	日本国憲法施行	
1948		
1949		
1950		

国土交通省の「白川・緑川治水史」によると中無田閘門の建設は当時の内務省の管轄で緑川と加勢川の改修を目的とした緑川第一期改修計画の中に含まれていた。当時の緑川の治水は加藤清正時代の霞堤などによって堤防決壊を防ぎ洪水を流域の耕作地に徐々に浸すという方法をとっており、そのため毎年下流域一帯は甚大な被害を被ってきた。計画は1925年頃から本格的に始まり水位を上げるための六間堰は1939年に閘門は1941年に完成している。

(3) 構造

形状は3門の木造のマイターゲートと呼ばれる河川からの排水と海水の逆流を防止する働きのある門を持つ石張りコンクリート構造である。緑川において川尻が船着場であったため塩害を避ける目的でこの門を採用した。

また門は河川に向かってハの字型になっておりこれにより水圧に耐えられる設計となっている。門の開閉装置は前回の改修までは手動であったが現在は電動のラック式開閉機となっている。

(4) 利用実績

完成当初は1日で漁船や天草からの木炭や薪などの輸送で20艘ほど通過。

現在は1週間に1艘ほど漁船が通過。

4. 川尻の街の地域形成

川尻町史によると川尻は熊本の南部、緑川の河口に

位置し鎌倉初期の頃、河尻荘の地頭に任命された河尻実明が河尻城を築き河尻の津を港として整備したのが始まりと言われる。また中国の明時代の地理書「図書編」にも「開懐世利」として登場しており中世から海外貿易が行われていた事がわかる。

川尻町史によると昭和9年頃の川尻の職業従事者は全1060人で全職業は112個である。その中でも特に多いのは日稼人を除き、菓子屋の57人で2番目が舟乗で42人、3番目が指物大工で38人となっており、上位3つの職業を合わせると全体比で12.9%となり、かなりの比率を占めることがわかる。その他職業を見ても、大工など職人業がその多数を占めており、川尻の町が職人街として成り立っていたことがわかる。また舟の貨物の集積地でもあり、一度お蔵に集められた荷物が加工され熊本市や三船や甲佐の方に再度運搬されていた。

現在(2012年12月時点)の川尻の町の商店の数は160店である。

5. おわりに

(1) 本研究の成果

中無田閘門は川尻の舟運期後半において舟を運ぶために重要な構造物であった。建設背景には当時の戦時中という時代背景が写し出されており土木構造物が時代と地域形成を知るための重要な資料の一つとなることがわかった。

(2) 今後の課題と展望

本研究では土木構造物を中無田閘門一つに絞って考察を行っていったが、地域の成立の過程では大小さまざまな要因や多くの構造物が複雑に関係している。今後はさらに一つ一つの構造物を調査分析し関連付けることにより地域形成を深く読み解いていきたい。

引用

- 1) 川尻町史(熊本大学図書館)
- 2) 御船町史(熊本大学図書館)
- 3) 白川緑川治水史(国土交通省熊本河川事務所)
- 4) 舟運と閘門(久留米河川図書館)
- 5) 中無田閘門改築及び付帯設備実施設計(九州建設コンサルタント)
- 6) 熊本県歴史の道調査-緑川水運-